

# 東江翻訳の真骨頂！ 名訳・珍訳集

●練りあげた日本語——まずはことばの巧みさ、美しさをひたすら  
味わう。

パジェットはかすかな嘲笑のとげを言葉にまぶした。

Paget lent the last three words a faint sardonic edge.

『罪の段階』（リチャード・ノース・パターソン 新潮文庫）

火花をして飛ばしめよ。鷲をして舞わしめよ。

Let the sparks fly. Let the eagles feast.

『カリフォルニアの炎』（ドン・ウィンズロウ 角川文庫）

月明かりのもと、長刃の <sup>マチエーテ</sup> 鉞 が銀色の光跡を描いて一閃する。

The machete is a silver flash in the moonlight

『野蛮なやつら』（ドン・ウィンズロウ 角川文庫）

恋し初めた相手は恋し遂げた相手とは違う人間であること。そして、恋は  
終着点ではなく、一人の人間が別の人間を知ろうとするその道筋で  
あることを。

that the person one loves at first is not the person one loves at last,  
and that love is not an end but a process through which one person  
attempts to know another.

『ストーナー』（ジョン・ウィリアムズ 作品社）

---

家じゅうの窓から吐き出された光の束が、闇に奥行きを与え、飾り格子の模様をゆるやかな雪のタペストリーに織り込んでいた。

The wreathed light from the windows gave body to the darkness,  
breathing tracery into the slow arras of snow.

『黄泉の河にて』より「センターピース」(ピーター・マシーセン 作品社)  
『ストーンナー』と「センターピース」の一節、ただただ美しい。

●表情を訳す——表情の描写は、登場人物の人となりや場面のリアリティをきわだたせる。

白くさわやかで<sup>ろう</sup>臍<sup>ろう</sup>たけた笑みがテリの顔にはじけ

As her grin cracked, clean and white and sharp

『罪の段階』(リチャード・ノース・パターソン 新潮文庫)

視線をもぎ離すのに、しばらくかかった。

It took a moment for Sharpe to turn from Caldwell

『罪の段階』(リチャード・ノース・パターソン 新潮文庫)

「臍<sup>ろう</sup>たけ」「はじけ」「もぎ離す」が東江節。

そいつの青ざめた<sup>あほうづら</sup>阿呆<sup>あほうづら</sup>面に浮かぶ<sup>あぜんしようぜんぼうぜんじしつ</sup>啞然<sup>あぜん</sup>悄然<sup>しようぜん</sup>茫然<sup>ぼうぜん</sup>自失<sup>じしつ</sup>の表情

the dazed befuddled expression on that pasty stupid face

『野蛮なやつら』(ドン・ウィンズロウ 角川文庫)

<sup>ほほえ</sup>微笑<sup>ほほえ</sup>むべきかどうか、口もとの筋肉が迷っていた。

his mouth teetering on the edge of a smile.

『ベルリン・レクイエム』(フィリップ・カー 新潮文庫)

表情が目<sup>め</sup>に浮かぶ。

● **会話の妙——登場人物のやりとりでキャラクターと関係性を描きだす。**

「好きだよ、父さん」

「おれの魅力には勝てんよ、坊主」

"Love you, Dad."

"How could you help it, son?"

『ストリート・キッズ』（ドン・ウィンズロウ 東京創元社）

**実の親子以上に深い絆で結ばれたニールとグレアムのやりとり。**

「なぜ、そんなことが言えるんだ？」

「御身、ボビーZ なればなり」

"How do you know?"

"Because you're Bobby Z," One Way says.

『ボビーZの気急ぐ優雅な人生』（ドン・ウィンズロウ 角川文庫）

**ラグーナビーチのいかれとんび、正気ならざる世界へ行ったり戻ってこられない男、ワンウェイのせりふが、文語調で仕立てられている。文語調なのにすっとぼけた味わい。それでいて、ホームレス詩人の清廉も感じさせる。**

● **クリエイティブな罵倒語、卑猥語**

決まり金玉

Fuck yes.

『仏陀の鏡への道』（ドン・ウィンズロウ 創元推理文庫）

**あまりにも有名な決めぜりふ。**

ざけんな。

Fuck you.

『野蛮なやつら』（ドン・ウィンズロウ 角川文庫）

「おしょんしょん、ちびりそう」

"I've got to pee."

『ウォーターズライドをのぼれ』（ドン・ウィンズロウ 創元推理文庫）

**ひどいブルックリン訛りで、ニールに英語を習うことになるポリーの台詞。  
ぶつとんだ創作訛りが衝撃的。**

「このでち棒か、与太郎」

"This cock, cabron?"

『野蛮なやつら』（ドン・ウィンズロウ 角川文庫）

「あんた、男ぶりが三枚ほど落ちたな」

"You look like shit."

『犬の力』（ドン・ウィンズロウ 角川文庫）

**なんとも洒脱な言いまわし。**

総身に知恵が回りにくそうな

big stupid

『ベルリン・レクイエム』（フィリップ・カー 新潮文庫）

**「大男、総身に知恵が回りかね」という言いまわしをうまく生かしている。**

皮肉のたっぷりこもった魚声で、つまり神経を魚で擦るような声で

in a very sarcastic fish voice

『デイヴ・バリーの笑えるコンピュータ』（デイヴ・バリー 草思社）

**バス釣りシミュレーションソフトの説明。fish voice がこんな具合に  
訳されようとは、デイヴ・バリーも思うまい。**

● **ときにはあえて硬質に——無生物主語や名詞中心構文をわざと  
用いて、衝撃を伝える。**

瞬間的な憎しみが、わたしに引き金を引かせた。

All at once, I hated him enough to shoot.

『罪の段階』(リチャード・ノース・パターソン 新潮文庫)

答えがメアリの口から飛び出すのをためらっているみたいに、また間があいた。

Another silence, as if Mary could not bring herself to answer.

『罪の段階』(リチャード・ノース・パターソン 新潮文庫)

**原文の主語はメアリだが、逆転の発想。**

その体の構えには、眠っているときと違って、ほぐれようのない静止の硬さが  
あった。

His posture had an unalterable finality that sleep lacks.

『数学小説 確固たる曖昧さ』(ガウラヴ・スリ&ハートシュ・シン・バル 草思社)

**主人公の少年時代に、祖父が亡くなった場面。**

● **言葉遊びを生かす——意味だけでなく、音や言葉遊びの面白さも  
伝えなくてはならないとき、東江一紀は、燃える。**

避けて通れない“闘争か逃走か”の葛藤<sup>かつどう</sup>

Your basic Fight v. Flight moment.

『野蛮なやつら』(ドン・ウィンズロウ 角川文庫)

しけた、しがない、しみつたれ。

Cheap chump change.

『野蛮なやつら』（ドン・ウィンズロウ 角川文庫）

**Ch- の頭韻を写しとりながら、意味もたたみかけている。**

「ヒマラヤの鄙<sup>ひな</sup>に、終日<sup>ひねもす</sup>ひらひらと雪はひた降る」

"The rain in Spain falls mainly in the plain."

『ウォーターズライドをのぼれ』（ドン・ウィンズロウ 創元推理文庫）

ミュージカル映画『マイ・フェア・レディ』に出てくる歌の歌詞 "The rain in Spain stays mainly in the plain" が原典。下町訛りを矯正するために作られた、ai の発音を「アイ」から「エイ」に直すための稽古用の一文なのですが、『ウォーターズライド……』に登場するブルックリン育ちの娘ポーリーは、「ひ」がうまく言えず、「あの人」が「あぬ人(しと)」になってしまう（という日本語訳における設定）。だからこれは、「ひ」を練習するための「あめんぼ赤いなあいうえお」。スペインじゃなくて、ヒマラヤ。雨じゃなくて、雪。しかしこれ以上の「原文どおり」があるでしょうか。みごとに韻が踏まれ、情景としてもすごく美しい。（那波かおり・翻訳家）

### ● 新たな領域への挑戦——映画化もされた『プレシャス』より。

東江一紀は、よく生徒に、「原文に自分の能力を引き出してもらうつもりで訳出する」ことを説いていた。ひとりの少女が、読み書きを教えてくれる先生との出会いで、豊かな感情と才能を目ざめさせていく様を描いた『プレシャス』の翻訳は、訳者にとっても、みずからの新たな能力を目ざめさせる作業だったにちがいない。

出典はいずれも『プレシャス』（サファイア 河出文庫）より。

でも、あたしは、わけがわかるよーに話したいし、ほんとのことを話したい。じゃなきゃ、いみないよ。うそとかくだらないことなんて、世のなかにはいっぱいあるんだから。

But I'm gonna try to make sense and tell the truth, else what's the fucking use? Ain' enough lies and shit out there already?

れんあいするて、どんなかんじだろ。いつもいつもいっつーもおもう。セクス、セックス、たくさん知てる。セックスいっぱい、いっぱい知てるけど、ともだちつくるて、どんなかんじだろ。あ、これ、おとこのともだちのこと。Wat it be like to be in luv. I wondr this al the time ALL time all the time. I kno sex sex so much. I kno bout sex alot a lot wht it be like hav a fren, thas a guy I mean.

**教育を受けていない少女、プレシャスが、ことばを覚えていく途中で書いた文。荒れまくる原文のニュアンスを忠実に反映しつつ、この上なく快適なリズムと力強さがある。**

あたし、自分の将来のこと、いっぱい考える。考えること、いっぱいある。いつも考えてる。ミズ・レイン、あたしの脳みそ活発で、きらきらしてるって言う。

I think about my future a lot. I think a lot. All the time. Ms Rain say I am intellectually alive and curious.

**物語終盤、プレシャスの言葉は、どんどん豊かになってゆく。**

---

●そして最後にこの一節を――。

薄白く広がる原野に、人の痕跡をとどめるものといえば、嵐か潮流の気まぐれで埋めふさがれた水路の位置を示す傾いた棒杭だけだ。杭の先に、みすぼらしい姿の鵜うがとまり、乾きかけた翼を風に向かって黒い十字架のように広げている。この古めかしい鳥が、生い茂るマングローブが、そして幾時代もの屍しかばねを収めた白い泥灰土からかすかな息吹を立ちのぼらせる水面下の生物たちの気配が、バークットの孤独と無聊ぶりようの思いをいっそう募らせた。

On the pale flats the lone trace of man was a leaning stake making some lost channel that a storm or shift of current had filled in. On the end of the stake perched a ragged cormorant, its drying wings held wide in a black cross against the wind. The archaic bird, the rampant mangroves, the hidden underwater life raising ghostly puffs from the white marl dust of ages of dead creatures, deepened Burkett's sense of solitude, of pointlessness.

『黄泉の河にて』より「黄泉の河にて」（ピーター・マシーセン 作品社）

ピーター・マシーセンの短編『黄泉の河にて』の冒頭部分です。いまから24年前（！）、一気に読者を作品世界に引き込んでしまうこの語り口に読み惚れ、毎日お経のように唱えておりました。このリズム、この文体！ 原作の要素をひとつも取りこぼすことなく、一語一語を訳者の心で読み取り、訳者の言葉で表現して、バークットという主人公の心情を描き出しています。みごとな情景描写に感嘆したとたんに、バークットという人物がいきなり強烈な存在感をもって眼前に立ち現れます。情景描写とは、単なる風景の報告ではなく、それを見ている人の内面を描くものだということを教えられました。当時、先生はまだ39歳の若さでいらっしやいました。それを思うと、鳥肌が立ちます。昨年、先生の亡くなられる2日前に完本を手にしたときには、このくだりを読んで涙があふれました。原文とともにお届けします。（布施由紀子・翻訳家）